たうんとぴっくす TOWN TOPICS

まちの話題や出来事を紹介します

市長日記

鉄の文化、連携確認

安来市・雲南市・奥出雲町で広域連携により組織する「鉄の道文化圏推進協議会」。その総会に8月2日、出席しました。

総会では、令和４年度事業計画・予算案を審議したほか、日本遺産の「出雲國たたら風土記～鉄づくり千年が生んだ物語～」が文化庁より、重点支援地域に選定されたことが報告されました（関連記事：8～9ページ）。

◀総会の様子（市役所安来庁舎）。左から勝田奥出雲町長、田中市長、石飛雲南市長。

このマークの記事は、関連写真を「市公式フェイスブック」で公開しています。

今月の1枚

「月山富田城跡竹水鉄砲合戦GUN GUN SPLASH THE FINAL」。月山富田城跡について地域内外に広くPRすることで地元住民の関心を高めることを目的としています。市内外から30チームの参加者が集い、盛り上がりを見せました。　　８月28日：三日月公園河川敷

33年ぶりの快挙

▲市長表敬訪問での結果報告。左から石黒百々花さん、坂田りこさん、椿未来さん、伊藤杏さん。

８月４日～８日に香川県で行われたフェンシングのインターハイ。女子学校対抗フルーレで安来高校が第３位を勝ち取りました。女子団体では、準優勝した1989年以来のベスト４入りとなります。

フェンシング部（女子の部）の椿未来主将は「去年はベスト８でそれを超えることを目標としていた。達成できてうれしい」と話しました。

安来高校では、今年引退の３年生とマネージャーを含め、男女あわせて35人がフェンシング部に所属。お互いに切磋琢磨し練習に励んでいます。

昔話を面白アレンジ

古典芸能に親しみを持ってもらおうと、アルテピアで８月11日に「子ども講談会～みんなでつくる「桃太郎」「浦島太郎」～」公演が開催されました。

川から流れてきたのは桃ではなく、梨、ぶどう、スイカ!?参加者が事前に記入した、好きな果物や動物を書いたカードを元に、講談師の玉田玉秀斎（ぎょくしゅうさい）さんが即興でつくり出すストーリーを、子どもも大人も楽しそうに聞き入っていました。

５歳の田中まほろさんは「自分が書いたカードも読まれて面白かったです」と笑顔で話していました。

▲カードを引いて、物語を変化させていく講談師・玉田玉秀斎さん。

市特産の梨を出荷

▲傷などが無いか確認しながら３区分（秀＞優＞良）に選別。県内や広島県、山口県へ出荷されます。

県内で一番の生産量を誇る安来市特産の二十世紀梨。８月24日からＪＡしまねやすぎ地区本部安来梨選果場で出荷が始まりました。

梅雨明けが早く降水量が少なかったため、今年は小玉傾向。しかし、暑い日が続いたことで、しっかりとした糖度のある出来栄えになりました。

やすぎ梨生産部会の岩田繁樹会長は「朝晩の寒暖差で糖度は上々。今年もシャキシャキとした食感とさっぱりとした味が特徴の二十世紀梨を多くの人に味わってほしい」と話していました。

女性活躍社会に向けて

地方創生の推進に向けて協働して取り組んでいこうと、８月３日に市とトキワホールディングス株式会社は包括連携協定を締結しました。

この協定によって、ソーシャルビジネスを展開する同社のノウハウやネットワークを生かして、移住促進や雇用確保、女性の社会進出の推進などの取り組みを、連携して進めていくことになります。

白尾卓也代表取締役社長は「意見交換を重ねながら、マンパワー不足で中々進める事が出来なかった部分をサポートしていきたい」と話していました。

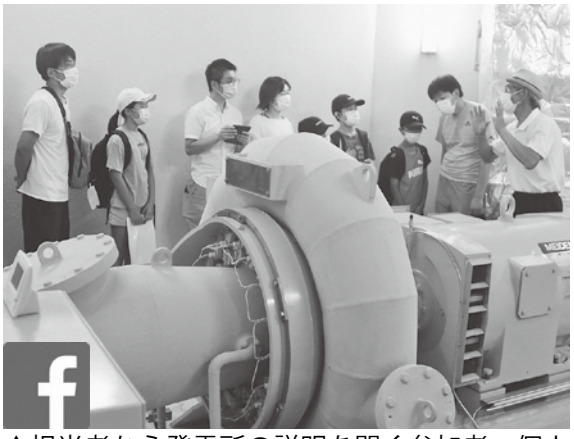
▲署名した協定書を手に持つ白尾代表取締役社長（左）と田中市長（右）。

「水が電気に」を学ぶ

身近にある自然環境の豊かさについて学んでもらおうと、８月７日に伯太発電所（水力発電所）で中海・宍道湖・大山圏域市長会主催の「子ども探検スクール」が行われました。

圏域の市町から親子連れ16組37人が参加し、普段入ることができない発電所内部の水車発電機や配電盤などを興味深そうに見学していました。

安来市内から参加した小学６年生の青戸陽万里（ひまり）さんは「水を使って電気をつくる仕組みを説明してもらい、とても勉強になった」と話していました。



▲担当者から発電所の説明を聞く参加者。個人住宅200軒分をまかなう電力量を発電します。

投光器で安全確保

▲電源となる発電機を投光器につなげ、動作確認をする錦町自主防災隊の役員の皆さん。

夜間の災害時に避難者の安全確保を図ろうと、錦町自主防災隊が宝くじの助成金を活用して、このほど同防災隊備品倉庫に投光器を導入しました。

同防災隊は、平成23年３月に発生した東日本大震災を契機に、共助の必要性を自治会全員が共有し結成。自治会中心部にある「一時避難場所」の広場に夜間照明が無かったため、整備しました。

足立覚司（さとし）隊長は「投光器を整備したことで、夜間の避難時において昼間と同じようにスムーズな声かけや助け合い行動ができます」と話していました。